

定信紀行

第四話

江戸大塚六園のこと

寄稿 市文化財保護審議会委員

佐川 庄司

松平定信は、文化初年に江戸大塚（現東京都文京区）の旗本屋敷や百姓地など約1万2千坪の敷地を購入し、同5年（1808）に抱屋敷「六園」を完成させている。六園は、当時の絵図によれば5代將軍綱吉ゆかりの護国寺の西側に所在していた。

六園は「むつの園」とも呼ばれ、三段に高低差のある地形を利用し「集古園」「竹園」「百花園」「春園」「秋園」「撰勝園」の6つのゾーンと御殿屋敷から構成されていた。定信の行った古文化財図録『集古十種』編纂など、文化的事業と密接に関連する庭園であった。

集古園には4棟の蔵が建ち並び、和漢の書画器財や集古十種の版本類をはじめ、定信が収集した文化財を収蔵保管する博物館的施設があった。

竹園は、その名のとおりさまざまな種類の竹が植栽され、百花園には花々を、春園には桜などの花木、秋園には紅葉などの花木、撰勝園には和漢舶来の珍木異草などが植栽されていた。

このように、六園は文化財

保存と植物園的性格を併せ持つ定信の博物学的趣向が反映された特異な庭園であった。定信が著した『花月日記』には、築地浴恩園から大塚六園に度々出かけたことが記されている。

■ 観光課 ☎ 5526

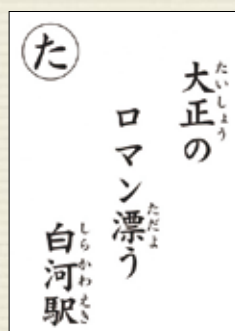


▶ 大塚六園館全図
(国立国会図書館蔵)

白河かるた 札でつながる今・昔



四枚目「白河駅」



白河に鉄道が開通したのは明治20年7月16日です。すでに鉄道が敷設されていた黒磯から延伸し、郡山まで開通したことにより、上野と白河が約6時間半で結ばれるようになりました。

明治19年12月時点で黒磯まで開通していたため、約半年の期間で郡山まで路線を延伸したことになります。

この開通は、関東甲信越から東北南部を通過する皆既日食の1か月前のことであり、観測を成功させるため国家的事業として取り組まれたものでした。大型の観測機材を持ち込んだアメリカの観測隊のほか、多くの見物人が白河に集まりました。

白河駅はその後、大正10

年に現在の場所に造り替えられ、今では全国でも数少ない大正期の木造駅舎となっています。木造平屋建ての赤い瓦屋根にステンドグラスをしつらえ、日本文化と西洋文化が融合した当時最先端のモダンなデザインは、人々を郷愁へと誘う大正ロマンを今に伝えています。

令和3年に白河駅は改築100周年を迎えました。

東北新幹線の開業により、主要駅としての機能は新白河駅に移りましたが、白河駅が結んだ100余年の軌道は、色あせることなく続いています。

■ まちづくり推進課
☎ 5533

お知らせ

ラウンジ

りぷらん

子育て情報

保健情報

くらしの
情報館

定信紀行

白河かるた

休日当番医・
無料相談ほか

市長の
手控え帖